
トンデモわいばん

殻史二五二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トンデモわいばーん

【Nコード】

N9677X

【作者名】

殻史二五二

【あらすじ】

遅刻しそうになり、普段は通らない裏路地を疾走する高校生、

長谷川、睦

はせがわむつみ

彼は運悪く異世界に続く開いた穴へと落下してしまう。

空から落ちゆく最中に出会ったのは白いワイバーンのシロであった。

睦は異世界で生きていくために郵便配達業を始める。

飛竜と少年が紡ぐ言葉を超え種族を超えた異種族間の友情物語。

【不定期更新です】

渡る異世界、竜ばかり

息を切らせながら、少年が裏路地を走ってゆく。

蜘蛛の巣が張っているこんな道を、普段ならば通ったりはしないのだが、電車に乗り遅れそうな今となっては、そんな悠長な事を気にしている余裕はない。

途中で何度もネコや犬が顔を覗かせ、構って欲しそうに少年を見つめる。だが視線の先にいる少年が慌てている様子に気付くと、ネコは道を譲り、犬は応援をするように吼える。

気遣ってくれる動物達にも構ってやれない申し訳なさから、急いでいるにも関わらず少年は手を上げて答えてしまう。本来の人の好きさが滲み出る動作だった。

（やっべ！ やべえ！ ただですら出席足りてねえのにいゝ！）

少年が寝坊さえしなければ、もしくはもっと寝坊をして遅刻が確定していれば、未来は変えられていたかもしれない。だが、少年は遅刻寸前で目を覚ましてしまった。

当たり前だが、運命は時に悪戯心を出す。

それは一瞬の出来事だった。裏路地を抜ける手前……建物と建物の隙間からは人通りが見て取れる程の場所に差し掛かった時だった。次の瞬間、訪れたものは陽の温かみでも道を歩く人々の喧騒でも無いものに包まれる。

——少年を襲ったのは一瞬の浮遊感と視界が陽の光から、見通せぬ闇へと変化だった。

こうして、少年はこの世界からその存在を消し去る事になる。

「なに？ なになになに！？　なんだよ！？　これえ！」

視界に広がるのは闇一色だ。少年は途中で完全にパニックに陥っていた。

感覚としては浮いていつているようでもあり、落下しているようでもある。

初めての無重力感にどうしていいかわからない。本来は平衡感覚を保つ為に必要な視覚ですら、暗闇に閉ざされて体がどこを向いているのかわからないのだ。

パニックにならない方がおかしい。

「ううわっ！　ああああ……っ！　誰でもいいから助けてくれよっ！」

声の限りに叫ぶが、反響しない声は自分には聞き取り難いものだ。声は闇にただ吸い込まれて、その存在が消えてゆく。

長く感じるような気が狂いそうな空間も、唐突に終わりを告げた。

しかし、その終わりに待ち受けていたものは、絶対的な絶望感である。

見渡す限りの青空……だが、無重力感はまだに消えない。変わりに風がビュービューと音を立てては通り過ぎてゆく。

少年がようやく解放された場所は、地上からは遥か上空数千メートルの所だったのだ。

眼下に広がる青々とした深緑の大地を見て、少年の顔が恐怖に染まる。

「う……そお……。なん……」

口から漏れ出た声すらも上へと残し、風の音で耳には届かなかった。

少年にとっての唯一救いがあったといえば、体は地上に向けてうつ伏せの状態で落下していたことだろうか？ そのお陰で普通よりも落下スピードは落ちてはいる。しかし、それも地上に叩き付けられる時間を数秒だけ引き延ばしたに過ぎない。

「~~~~っ！」

叫ぼうにも風圧で口が閉じられず、強制的に肺へと空気を送られて胸が痛く感じる。それと同様に風圧は瞼を押し開けて、眼球へも圧力を掛けてきた。

少年が目を閉ざしたのは痛みか恐怖からか……

（俺……ここで死ぬんだ……なんで？ こんな所に……）

思考しようにも体は異様に冷えて、頭が回らなくなる。体を感じるのは異様な寒さと、浮遊感だけだ。その浮遊感もついには感じなくなる。

感じたのはポスツと軽い衝撃と寒さ、それと胸や顔に感じる温もりだけ……

（あれ？ あったかい？）

顔に当たるのは、暖かいザラつとした感触だった。硬いようで柔らかい……ただひとつわかったのは、これは地面以外の感触であると言うことだけだ。

相変わらず風の音が耳に煩いが、風が吹く方向が違う事に気付く。

さっきまでは前から後ろに流れる風だったのだが、今は頭の上から吹いているようだ。その風も勢いが落ちている気がする。

少年は思い切って目を開けてみる。目の前は白一色が広がり、驚いて白い床に手を着いて体を起して、今いる場所を確かめる。そしてようやく白い床の正体がわかった。

それは、おとぎばなしにでも出てきそうな竜の背中だった。広く感じるその背中に少年は乗っていたのだ。

背中感触から、少年の存在に気が付いたのだろう。竜は飛びながらもその長い首を器用に後ろへと向けて振り返った。尖った口とそこに並ぶ鋭い牙、そのあまりの恐ろしさに悲鳴を上げる。

「……ひっ！ うわぁ……っ！」

恐怖心から疑問を抱く前に思わず、立ち上がってしまった。飛んでいる足場の悪い竜の背中の上で……

少年の体が当然の如く風に押されて、体が後ろへと流されてゆく。気付けばまた空へと放り出される格好となっていた。

（あ……だめだ……）

なんて馬鹿な事をしたのか頭に後悔が過ぎるが、それも一瞬だけの事だ。

すぐに落ちて死ぬのも食われて死ぬのも、同じこと。むしろ、地面に叩き付けられて死んだ方がまだマシだと思えてしまった。

しかし、現実はそのなにかいものでは無い事を、少年は思い知る。全身が白い鱗に覆われた竜は、空中でUターンを決めると少年に向かって、その巨体を向かわせてきたのだから。

その視線が明らかに自分を見据えている事を、少年は遠目ながら

もはつきりとわかった。

(……は……ははっ……結局は食われるのかよ……)

グングンと近付き、大きくなってゆく竜の巨体……その時、少年は自分が大きな誤解をしてる事を知った。

竜の体には手は無く。手の変わりに翼には鉤爪がついている事から、ドラゴンの竜ではなくファンタジー小説などに出てくるワイバーンと呼ばれる飛竜だったんだと。

そんな事に気付いたからといって、何かが変わる事などありはしない。

白いワイバーンは少年のすぐ傍まで来ていたのだから……

ワイバーンは高速で少年へと迫ると、地上から十数メートルのギリギリで目標を違わずに、その尖った口に捕らえる事に成功した。そのまま、スピードを落としてゆっくりと近くの地上に降り立つと、地面へと顔を寄せて口を開いた。

「あ、あ……たす、かったのか？ えっ？」

地面には服の襟首が伸びきった少年が地面にへたり込んでいた。呆然とする少年に向かって、鼻先を擦り寄せてくるワイバーン。

「もしかして……助けてくれたのか？ おまえ……？」
「キュウーイ！」

白いワイバーンはその巨体に似合わない可愛らしい声で、少年の問い掛けに答えるのだった。

名前と優しさと……

白いワイバーンと少年がじゃれ合っている。

ワイバーンは巨体だけあって、頭だけでも少年の胴体より大きい。それが少年を気遣いながら頭を擦りつけたり、少年に撫でられたりしている光景は異様の一言だといえよう。

最初はおっかなびつくりに触っていた少年も、害意が全く見えないワイバーンにすっかり慣れて、角に触れたり魚のヒレにも見える耳を撫でたりしていると、ワイバーンはとても気持ち良さそうに目を細めた。

横に並んで生えている角の間を撫でられる事が、気持ち良いらしく喉の奥を猫のようにグルグルと鳴らして喜んでいるようだ。

「それにしても……ここってどこだよ。なあ？」

「キュイ？」

ズボンに付いた土を払いながら地面から立ち上がると、周囲を見回して呟いた。

その声に、ワイバーンは少年の顔を見つめて、小さく首を傾げる。少年がいる場所は草原と表現するしか無い所だった。下草は短く周囲に見えるものといえ、遙か遠くにある森のような場所と、さらに遠くに見える連なる山々……

日本では見た事も無い光景に、困ったように頭を掻く。

少年は意外と自分が動揺していない事に驚いた。それもそのはずだ。つい先程まで、死の恐怖や生きたまま食べられる恐怖を感じていたのだ。

見知らぬ所にいるという恐怖よりも、今は生きているという喜びの方が大きいだけだが、それでも、今の少年にとっては落ち着いて

状況を考えられる事はありがたかった。

「……それにしてもよかったよ……俺マジで死ぬかと思ったもん。ううん、お前がいなかったら死んでただろうなあ」

あのまま落下を続けて地面に叩き付けられる自分を想像して、少年は体を震わせる。

少年はありがとな、と言って感謝を表すように、ワイバーンの首筋を優しく撫でた。

「そうだ。いつまでも名前無いの不便だな。“お前”とかって、命の恩人には失礼だし……名前ないのか？」

「キュ？」

少年の問いかけにワイバーンは一声鳴いて、小さく首を横に降る。

「……もしかして、人の言葉わかるの？」

「キューイ！」

今度は大きく首を縦に降る。その顔はどこと無く嬉しそうだ。

「……言葉がわかるなら立ち上がって、胸を張って見せて……」

少年は何かのゲームで見たワンシーン……、竜が雄雄しく翼を広げるシーンを思い出して、生でそれを見れたらと思い、お願いしてみた。

「キュ？ ……ギユ、ギュイウ！」

少年の意を汲んだのかはわからないが、一瞬だけ戸惑った様子を

見せ、二本の太い足で立ち上がる。ワイバーンは高々と空を見上げて胸を張り、純白の美しい皮膜が張った翼を大きく広げて見せた。バサツと翼を広げた際に、一瞬だけ暴風が周囲に吹き荒れる。

「……………おお、おおー！　すげえ！　マジスゲエ！」

少年は目の前にいるワイバーンに、我を忘れて感嘆の声をあげる。その大きさは五階建てのビル程もあろうか？　広げられた翼のせいで、少年の周囲には大きく影が差している。

何より逆光で陽の光を背負った姿は、ゲームの映像など比較にならないほど、雄雄しく白い体躯と相まって、神々しささえ漂っていた。

少年はすげえ以上の感想が言えなかった。目の前にいる存在が大きすぎて、そして、その姿があまりにも美し過ぎて、油断をすれば目から涙が零れそうになる。

本当の感動を覚えたのは…………少年にとって、初めての経験だった。

「キューキュー…………？」

時間を忘れて見入っている少年に、ワイバーンは“もういい？”と言う表情で問い掛ける。だが、我を忘れてしまっている少年には届きそうもなかった。

「だから…………俺が悪かったって…………機嫌直してくれよ…………」
「ギョッギョッ！」

あれから一時間近くも同じポーズを取らされ続けたワイバーンの機嫌は、かなり悪くなっていた。

それはそうだ。翼を広げたままだったせいで、時折吹く風をもろに受けてよろめくのを、バランス取りながら、一時間も耐えたのだ。その体に受けた疲労は相当なものだろう。

今は疲れたように地面に体を伏せさせ、少年から顔を背けている。それでも、少年の下から飛び去ろうとしないところを見る限り、嫌われてはいないのだろう。少年はホッと胸を撫で下ろした。

「名前。そう名前を考えたからさ！ 機嫌直せって……」

「キュ……？ ……っ！ ギュイ！」

少年の言葉に、ワイバーンはチラリと視線を向けた。そこにはワイバーンの様子を見てニヤリと笑う少年の姿が映り、慌ててまた顔を背ける。

「自己紹介まだだったよな？ 俺の名前は睦^{ムツミ}。長谷川睦^{ハセガワムツミ}って言うんだ。んで、おまえの名前だけど……シロ！ シロでどうだ？」

「キュイ？ キュキュイ……ギユ！ キュギユウ！」

ワイバーン——シロは頭をあげると睦に向かって顔を向けた。そして、しばらく考えた様子を見せると、体を起して睦の周囲を飛び跳ねだした。

「どうって……その様子だと気に入った？」

「キュイ！ キュキュキュイ……イ！」

体長十二〜三メートル、体重にいたってはトン単位の生き物が、自分の周りを跳び撥ねる姿は異様だった。傍に居る側としては堪ったものではないが、睦はシロの喜ぶ姿に水を差すわけにもいかず……苦笑を浮かべながら、舞い立つ砂埃をジッと我慢するのだった。

「さて……これからどうしようかな……」

シロが喜び終わるのを待って、睦が口を開く。

先程おきた死の恐怖感からの開放や、シロの姿に圧倒されて忘れていたが、睦はここがどこだか……更にはこれからどうしていいのかもわからなかった。

ふとすれば不安感が押し寄せてくるが、シロのお陰でまだマシだといえる。

もし一人ぼっちだったならば、今頃は不安感から泣いていたからしれないだろう。

（いや……間違いなく泣いてたな。高校生にもなって迷子で泣くなんて情けないけど……）

「キュー……?」

シロが心配そうに見つめてくるが、睦は強がり笑顔を作って答えて見せる。

「せめて、鞆があつたらなあ。あん中に弁当も入ってたし、携帯も……ってあってもどうしようもないだろうけど……」

無いものねだりはしょうがないと思ってはいても、弁当だけは切実に欲しかった。まだ、昼をちょっと過ぎた時間だろうが、遅刻しそうだったので今日は朝食を食べ損ねたのだ。

「キュー……キューイイ!」

睦がお腹を押さえる様子を見たワイバーンは、突然走りだしたと思ったら、そのまま二度三度と翼をはためかせた。

何度目かの力強い羽ばたきで、巨体をフワリと浮きあがらせると、大空へと上昇してゆく。

そして、気流を捕まえたのか。一気に加速するとあっという間に上空高く見えなくなった。その姿を見て、睦は地面にガクリとへたり込む。

「お……おい！　なんだよシロ！　俺を置いてくなよ！　おい……置いてくなよう……」

睦はシロの飛び去っていった方向に恨みの視線を向けるも、単に強がりだった。

この世界で唯一の知り合いであるシロに見捨てられ、途方に暮れてしまう。

今や昼は過ぎて、既に陽は傾きつつある。例え今から人が居そうな所を探して歩き回っても、見つかりはしないだろう。

つまりは、睦はこの世界において完全に孤立してしまった事を指していた。

「くっそ……あの馬鹿シロ……機嫌直したんじゃないのかよう……」

先程までの拗ねた姿を見せていたシロを思い出して、愚痴を零す。目にはうつすらと涙を浮かべ、睦は地面に膝を抱えて座り込んでしまった。

どれぐら経っただろうか？

シロが帰ってくるんじゃないかと、その場で待っていると……

——オオオ……オン！　という犬とは少し違う遠吠えが、睦の耳に響いてきた。

睦は遠吠えを聞くと、ビクリッと体を飛び跳ねさせた。

「……まさか……ここまでこない、よな？」

睦は犬と似た遠吠えに嫌な予感が走る。

その脳裏に浮かぶのは森の中で徒党を組んで狩りを行う動物——
獰猛な狼の姿だ。

いくら、動物に懷かれやすい睦とはいえども、飢えた狼に懷かれるとは思えない。

地面から立ち上がると、遠吠えが聞こえた方向……遙か遠くに見える森へと視線を向ける。

遙か遠いと言っても、睦は安心することが出来なかった。動物に懷かれやすいだけで、まだ高校生なのだ。動物に対してそこまで詳しい訳ではない。

ましてや、狼が狩りをする範囲などわかるはずがなかった。

「シロ……シロオ……！」

どんどん不安になっていき、この世界で唯一頼れそうな存在の名前を呼び叫んでいた。

——キキューイ……

その時、睦の耳に聞きたかった声がしたような気がする。

「シロ！」

白く神々しいワイバーンの名前を呼びながら、睦は薄らと夜闇に染まりつつある空へと視線を走らせた。

そこには月ではない白い影が、こちらへと飛んでくる姿が映る。

睦に近付いて来るにつれて白い影はその大きさを増して行き、その翼を広げる見知った姿を確認した時、睦の心には言い知れぬ熱い

ものがこみ上げてきていた。

シロは睦のかなり手前の空中で翼をはばたかせ、急制動をかける。その翼が起した突風で、睦は草原の上を吹き飛ばされて転がっていったが、すぐさま立ち上がると、地上に降り立ったシロへと駆け出してゆく。

「シロ！ シロオ！ 馬鹿！ バカシロ！ 脅かすなよお……」
「キュ？ キキュウ？」

シロは涙を浮かべながら足へとしがみ付いてくる睦を、どうしていいか解らず困惑する。

「なんで……こんなことすんだよ……俺……捨てられちゃったかと思っただろ……」

「キュ？ キュキキュウ！」

睦が離れた事でシロは足と翼を折り畳むと、翼についている鉤爪の指で掴んでいた物を地面へと落とした。

軽い音と重い音が響く。地面に睦がこの世界で落とした通学鞆と、見知らぬ果実の生った太い枝が落ちていた。

鞆は持ち手の片方が千切れてはいたが、地面には叩き付けられていなかったのか、鞆そのものは無事であった。殆ど中身が入ってなかったと言う事もあるだろうが……

太い枝の方には甘く熟れた匂いを放つ洋梨みたいな果実が生っており、枝の根元は無残にも強い力で引き千切られていた。

その二つを見て、漸くシロが何をするために飛んでいったのかわかる。睦はもう一度、今度は足ではなく地面に座っている巨体へと抱きついた。

「ごめん！ シロの事を馬鹿って言って……それと、ありがとうな？」

「……キュキ、キューイ」

シロは自分に抱きつく睦の顔に頭を寄せると、人を丸のみできそうな口から舌をだして、睦の顔を舐める。

「……ははっ……やめろってえ……」

「キューイキューイ」

少しざらつく舌の感触に、こそばゆくなって舌から逃げようとするが、シロの体からは決して離れなかった。

そうやって、じゃれ合っているといつの間にか睦の心から不安感が舐め取られてしまったかのように、綺麗に消え去っていたのだった。

空へ、街へ

蒼天に雲と見紛う白い飛竜が、空を泳ぐように風に踊る。

地上からは春を思わせる花の香りが天高く舞い上がり、空で遊ぶシロと睦の下へと届ける。

睦がこの世界に来てから一日が経とうとしていたが、睦の心には不思議と寂しさや不安感といったものが感じられなかった。

夜に寝る時も、睦を抱きかかえるように寒さと外敵から守り、寂しい時には慰めてくれるシロの存在が大きいからだろう。

しかし時間が経つに伴い積み重なる、“誰かと話せない”といった寂しさだけは、シロでもどうしようもなかった。

だからこそ、こうして睦とシロは人の居る場所へ——街を探して空へと旅立ったのだ。

この世界に來た初めに落下の恐怖を味わった睦は、最初はシロと飛ぶ事を嫌がった。だが、シロがしつこく誘ってきて、ついに根負けして乗ったのだが……。

「あはははっ！ すっげえ！ すげえよ！ シロ」

今では初めの嫌がりや恐怖感が嘘のようだ。シロの首に跨りと翼の付け根に足を掛けて、両手を広げられるまでに慣れている。

いや、睦はまだ知らないがそれは……竜に乗りなれて、空を自由に駆る騎竜使いのようですらあった。

「グキューキューキュ〜♪ キューキュルウォ〜♪」

睦の喜ぶ声に答えて、シロもご機嫌に歌いだす。高さと速度こそ低くゆっくりではあるが、シロは空の散歩を楽しんでいる。一方の睦は、上空から見える空と大地が交わる地平線に心が昂ぶっている。

「なんだよ。あはははあ、シロ、それ歌なのか？」

「キューグキュー♪」

一人と一匹は空の上でじゃれ合いながらも、順調に街へと向かって飛び立っていた。

睦は首筋の鱗に捕まって、ゆっくりと眼下の光景に目をやる。遙か彼方に見えていた森を過ぎて、川を越えた辺りで道らしい筋が見えてきた。

「あ！ シロ。道だよ！ 道！ あれを辿っていけば街にいけるんじゃないか？」

「キューイ。キューオ！」

シロはしばらく空を旋回したあとで、川沿いの道を空から辿る。目的の場所は、遠く海と川の河口にあった。

海の水面がキラキラと陽の光を反射して輝き、海と川を繋ぐ河口に白い街と何隻もの船が停泊しているのが見えた。

「シロ！ 街だ。街だよ！」

「キューイ！」

「あれ？ でもなんか慌ててないか？ あの人たち……」

睦の視線の先……街の通りを歩いていた人影や、港で働いていた

人達が、慌てて建物の中に入っていく姿が目映る。

そこで漸く、睦は自分の失態に気付く事ができた。

街の様子をこちらが良く見える位置にまで近付いているという事とは、街からも睦達——ワイバーンが良く見えるという事だ。

「ああ！ やばい！ やばいよシロ！」

「グツキュ〜？」

「“ぐつきゅー”じゃないよ。俺達きつと危険だと思われてるんだ！ 誤解を解かなきゃ！」

「キュイ！」

「街の外にゆっくりと下りて！ 脅かしたら駄目だからね？」

「キュウ、キューイ！」

シロは睦の言葉を正確に理解して、一度大きく街の外を回る。旋回を終えた後は、ゆっくりと外壁の外に降り立っていった。

街の街門が開き、すぐさま鎧姿の兵士達が飛び出してきた。

睦はすぐにでもシロの背中から降りようとしていたが、飛び出してきた兵士達を見て、降りるに降りれなくなっていた。

「これは……ワムが子供を……それも人間の子か？」

兵士達の中でも隊長らしい——頭に羽飾りの付いた兜を被った兵士が、油断無く槍を構えながら呟いた。

槍を向けられ兵士に囲まれるよりも、睦は別の理由で呆然と固まっていた。

兵士達の頭部、甲冑で見えない者は除くが……全員が違う頭部を持つ人間だったからだ。

その種類は多様を極め、虎に豹、犬に猫、果ては竜の頭部を持つ者までいた。

「おい！ その……ワムに乗っているチビ助。ワムから下りろ！」

隊長が放った一言に、睦はカチンとくる。

確かに睦は同年代の少年達から見ても、お世辞にも背は高い方では無かった。本人もそれを気にしていたから余計である。

だからといって決してチビと言う訳でも無かった。単に、初めて出会ったこの世界の獣人間達が大きすぎるだけなのである。

「誰がチビだよ！ 俺には睦って立派な名前があるんだよ！ この蜥蜴人間！」

まさに、売り言葉に買い言葉だ。ついカッとなって怒鳴ってから、睦はしまったと言う表情を浮かべた。

「誰が蜥蜴だ！ 儂は竜人だ！ リザド族などと一緒にするな！
ともかく下りてこい。抵抗しなければ、危害を加える気はない！」
「グルウォー！ ギュウー！」

自分に槍を向けられているからか、もしくは睦に槍を向けられているからかは解らない。だが、シロは警戒心を剥きだしにして喉の奥を低く鳴らす。

まさに、一触即発の状態だった。

この世界でも、ワムと呼ばれる飛竜族は脅威に値する。

飛行能力だけを取るならば世界広しと言えども、右に出るものはいない。ブレスこそ吐かないが、空から降下してきた飛竜の巨体の威力はブレスに匹敵する。

兵士達も街を守るという使命感から、ここにはいるものの……実際に腰が引けてしまっている。もしもシロがその気になれば、兵士は元より街そのものを破壊しかねない程の脅威を目の当たりにしているのだ。従って、隊長らしき人物もワムに乗る人物をなるべく

なら刺激しないように細心の注意を払うよう徹することにした。

睦も警戒感から中々降りようとはしない。

それもそのはずだ。周りを取り囲んでいるのは武装した兵士達であり、一方の睦は丸腰なのだ。例え武装していたとしても元々は平和な世界に住んでいた睦の場合、決してすぐさま降りる可能性は無かったのだが……

「あー……その。チビ助と言って悪かった。ムズメだったか？ 本当に危害を加えるつもりはないから降りてくれんか？ 君がその状態のままだと、いずれ兵士達が暴走するかもしれんのだ……」

「俺の名前はムツミです！ ム・ツ・ミ！」

「変わった名前だ。人間ではそれが普通なのか？ わかった……ムツ……ミ？ だな？」

「はい」

「おい！ お前達も武器を下ろせ！」

睦がコクリと頷くのを確認し終わると、隊長が周囲を睦達を取り囲んでいた兵士達を一喝した。兵士達は顔を見合わせて、渋々ながら武器を下ろしてゆく。

「我々に、敵意は無い。これで、分かって貰えただろうか？」

「わかりました……。本当に何もしいんですね？」

「あー、その事情を聞かせて貰う為に、詰め所へは来てもらう。……だが、危害を加えたりや捕らえたりといった事は決して行わないと、竜玉に誓おう！」

その言葉を聞いて安心した睦は、ゆっくりとシロの背中を滑るように降りようとする。

「キュオ……クルオオ……?」

「大丈夫だよ。シロ、このままじゃどうしようもないからね? ても……」

最後の方だけはシロにしか聞こえない声量で呟くと、睦はスルスルと背中を滑り降りた。

そして——久しぶりに地面へと足を着けると、竜の頭部を持つ隊長の所へと歩みよった。

「シロ! 行って!」

「ルオオオオ……オン!」

睦が声をあげると同時に、シロは大きく飛び跳ねる。兵士達の頭上を軽やかに越え、その勢いのまま平原を走り、助走をつけて空へと舞い上がった。

「お前! 何を!」

周囲の兵士達はざわめき、隊長は剣呑な雰囲気放つ。

「俺には危害を加えないといいましたが、シロに危害を加えないと言われてなかった、シロを逃がしました。まだ、俺は貴方達を信用はできませんから……」

「チッ! しょうがない。ワムの無事を保証しなかった儂にも非はある、か? わかった。だが……、あのワムが街に危害を及ぼす恐れは無いのだろうか!」

「俺が無事である限り、街や人に何もしないように言っておきましたから大丈夫です。だけど、夜までに俺が開放されなかったら、その時は分かりません」

睦を心配するようにしばらく上空で旋回した後、森の方へと飛ん

でゆくシロの姿を視線を誰もが眺めていた。暫くの間、竜人の隊長は何かを思案していたようだったが、やがて苦い表情を浮かべながら渋々頷いてみせた。

「ワムに言っておいたのか。……ワムが人の話を理解するとは思えん。だが事実、お前……ムツミはワムに乗り、ワムを操っていたから信用する他はないのだろうな……。了承した。このまま、くだらん問答で夜になったら目もあてられん。おい！」

シロが飛び去った事で、安堵の表情を浮かべていた兵士のうち一人——虎頭の青年を隊長は呼びつけた。

「詰め所まで、ムツミとやらを丁重に連れて行け。俺は議長に話をつけてから詰め所に向かう。いいか？　くれぐれも丁重にだぞ？　わかったな！」

「了解いたしました！　隊長！」

返事に一度だけ頷き了承すると、隊長は睦から背を向け颯爽と街門へと他の兵士を引き連れて去っていった。

隊長は途中に一度だけ、シロが飛び去っていった方向を見上げる。やがて、搾り出すように大きな溜息を漏らすのだった。

世界より、失われし……

街門を抜けると、そこはまさにファンタジーな世界が広がっていた。

建物は何の素材で出来ているのかわからないが、石灰のように白く街全体が輝いているように見える。

都市部に住んでいた睦は、人混みなど見慣れてはいたが、地球の人込みとはまた違った風情が感じられて新鮮だった。例えるならば祭りの賑やかさと言った風情だ。

街門から延びる大通りには果実や野菜、肉や魚が数多く並べられた店が立ち並び、そこを動物や幻獣の頭部を持つ者や人間の顔に獣の耳や鼻が付いているだけの人までもが引っ切り無しに行き交っている。

しかし、どの顔にも安堵の表情が伺え、睦は少し居心地悪く感じた。

今こそ安堵しているが、それは間違いなく自分とシロが引き起こしたしまった混乱のせいで、人々を不安にさせたのだとわかったからだ。

「おい……えーと、メチュメだったか？」

睦が内心、申し訳無いと思いながらも周囲の光景に圧倒されると、突然頭上から声が掛けられた。

「あ、はい……ていうか。ムツミです！」

「んな事はどうでもいいさ。それよりも、本当にワムは街には危害を加えないんだな？」

可愛らしくも見える虎の顰められた顔に、ムツミは即答で頭を縦に振った。

「シロはそんな酷い事をするような奴じゃない。だから大丈夫!」

「あのなあ……ワムが酷い事をしないって……ワムはなんでも食っちゃもう悪食で有名なんだぞ? 特に大好物は人の肉だっつーじゃねえか。信用できるか!」

「他のワムとか呼ばれてるのなんか知らないよ。ただ、シロは絶対に俺との約束は破らないって信じてるから!」

「はあ……。もしも、あの白いワムが街を襲いやがったら……唯じやおかねーからな?」

虎頭の青年は、そう言いながら見下ろすように、睦を睨みつけた。睦も睦で負けじと下から睨み返す。

二人が大通りの真ん中で睨み合いをしていると、唐突に人込みの中から小柄でスレンダーな少女が飛び出してきた。

背の高さは睦より頭一つ分は小さく、ショートヘアの金髪には飾りのように三角の獣耳が左右に乗っている。鼻も黒い逆三角形の獣鼻で、昼間の明るさのせいで縦に細められた瞳は髪と相まって、その活発さを表現しているようだ。

まさに見た目は獣寄りの、ネコ娘とでも表現するべきか。

その少女が、虎頭の青年に突然体当たりをした。不意の体当たりを食らった青年からは、フゴッと情け無い呻き声があがった。

「こんつのバカ兄貴! あたしの扉を外から固定したでしょ! お陰で白いワムを見損なったじゃない! このバカ兄貴! 死ね! 水に浸かって……いや、あたしが海に沈める!」

「アゴォ、ブギ、ギニャー! ま……まてまてまて! ストロープ

！ 止まれ！ とまれっての！ このじゃじゃ馬が！

「うっさい！ 死ね！ 死ね！ その体を餌にもう一回、ワムを呼んできなさいよ！」

「わあった！ わかったから、マタタビの実をダースで買ってやるから……頼むから待て！ 仕事なんだよ！ 俺は！」

最初の一撃で腹部に痛烈な痛みを貰い、その後さらに目にも止まらぬ踏み付け攻撃を喰らい——少女の息が上がったところで、ようやく青年は解放される。その全身には、靴の跡が余すところ無く付けられていた。

少女は兄貴の嘆願ともとれる、言い訳の真意に気付いたようだ。漸く隣で、呆然と惨劇の一部始終を見ていた睦の存在に気が付いた。未だ茫然自失状態の睦を無遠慮に見つめると、頭をポンポンと撫で叩きながら話しかけた。

「あら、やだ！ ごめ〜ん！ 君、イタズラで捕まっちゃったの？ マヌケだねえ……」

「うわああ！ な……何するんだよ！」

「ふえ？ 何って慰めてるんだけど？ イタズラもバレないようにしなきゃ」

「い……イタズラって？」

「おい。イシュテラ。そいつはイタズラのグラム妖精じゃないぞ？ 正真正銘の“人間”だ」

青年が発した言葉に、イシュテラと呼ばれた少女の顔が固まった。睦は不思議そうに首を傾げる。すると、聞こえていたのか周囲を微笑ましそうに見ていた人達もイシュテラと同様に固まり、騒がしい筈の市場の一角が静寂に包まれる。

「オニイサマ？ 今……なんと……？」

油の切れた機械のように、イシュテラはゆっくりと首を兄である虎頭の青年に向ける。

その問い掛けは注目を集め、周囲の人達も固唾を飲みながら、睦と青年を交互に見つめた。

青年は無用に注目を浴びているのがわかり、眉を顰めて溜息と一緒に吐き出すように呟く。

「お前が“様”付けするなんて気持ち悪いから言ってやる。そいつの目をちゃんと見てみろ。グラム妖精なら黒目しかないだろ。間違はなくそいつは“人間”だ」

「ちよちよちよ……ごめん！ ちよつといいかな！？」

先程まで固まっていた体はどこへやら……俊敏に動く睦との間合いを詰め、両手の指でそつと瞼を大きく開かせる。

「いてっ！ いきなり何をすんだよ！」

「あっ！ ごめん！ 本当にごめんなさい！ ……でも、本当に“人間”だっ……」

目を開けられた事は痛くはなかったのだが、急に潮の香りに晒された白目に痛みが走った。思わず後ろに後退ってしまう。

思わぬ睦の反応で、イシュテラは本当に申し訳なさそうな表情を浮かべる。両手を合わせて必死に謝るのだが、同時に呟いた謝罪の言葉は周囲の人達が上げた驚きの叫び声に掻き消されたしまった。

この出来事により、“噂は一日で千里は駆ける”という事実を身をもって陸は味わった。

市場の一角で湧いた騒ぎは、その後すぐさま市場全体へと広がっ

ていったのだ。

「人間だって……」

「あの伝説のか？ まだ存在してたのか？」

「……また、グラムのイタズラじゃねーのか？」

「見てみて！ 肌がきめ細かい。生まれたばかりの赤ちゃんみたい……」

人々の眩きになっていない噂話の声と、周囲の好奇に満ちた視線は容赦無く睦に降り注ぐ。

今までの人生経験でここまで注目を浴びるのが初めてだった睦は、羞恥と気まずさでガチガチに固まってしまった。

「どけどけ！ なんの騒ぎだ。これは……なんだ。お前達か？ どうしてまだこんな所にいる！ なんだ。この騒ぎを説明しろ！ ダズ！」

時間が経つにつれて、周囲の人垣は厚みを増してゆく。騒ぎを聞きつけたのか、幾重にも重なった人の群れを掻き分けて、豪華な鎧に身を包んだ竜人族の隊長が現れた。

隊長の姿を見るなりダズと呼ばれた青年の顔が、みるみる真っ青になっていく。

「あ……いえ、その、これはですね？」

「ちょっと、隊長さんや。あの小さい子が“人間”だって本当かい！？」

ダズがしどろもどろになりながら、何とか言い訳を考える間も無

く。少し離れた場所で果物を売っていた丸い獣耳のオバさんが、空
気も読まずに隊長へと問い掛ける。

おぼちゃんの言葉を聞くなり、青い肌の竜顔が赤くなっていく隊
長の様子は、今日初めて出会った睦ですら分かるほどだった。

「ダズ！ 儂は言ったはずだな？ 丁重に、丁重にお連れしろと：
…これはどういう事か！」

隊長の怒声に、流石のおぼちゃんも拙い空気を感じ取ったのか人
込みへと紛れ込んでいく。

その頃、ダズの顔色は真っ青から完全に蒼白となっていた。ヒゲ
は萎れて耳も後ろに畳まれ、尻尾は股の間へと巻き込んでしまっ
ている。

「~~ゴ~~……ごめんなさい！ 隊長さん！ 私が迂闊だったから……」

その時、天の助けとばかりに横からイシュテラの済んだ声が響い
た。一歩前へと踏み出し、隊長へと大きく頭を下げる。

イシュテラの態度と言葉に、隊長は鋭い目でジロリとイシュテラ
を睨み付けた。隊長の無言の迫力にイシュテラの髪が逆立ち、耳が
後ろに倒れる。

「あ！ ごめんなさい！ 俺がうつかりと“人間”だって、バラし
ちゃって……。だって、ここで人間がこんなに注目を集めるなんて
思ってもなかったから……。だから、俺が悪いんです！ 本当にご
めんなさい！」

イシュテラが涙を溜めながら謝る姿に、睦は居た堪れなくなつて
声を張り上げた。

ダズとイシュテラが、驚いた表情で睦を見つめる。

睦とて隊長が恐くない訳ではない。だが、一応は高校まで通ってきた頭で考えると、自分の所為にした方が一番いいと考えたのだ。

「お前等……隊長。すんませんでした。俺が妹にうっかり言っちゃったのが悪いんです。どの様な処分でも甘んじて受けます」

今まで隊長に怯えていたダズだったが、二人の行動を見て責任を取るのは自分の役目だと我に返る。そして、隊長の前に膝礼をする
と耳をピンと立てて、頭を垂れた。

三者三様の姿を見て、隊長は深く溜息を吐くしかなかった。

「まったく……これだけの衆目の中で許さんかったら、俺が悪者になるではないか……。だからと言って、まったくの罰無しで許すわけにもいかん。俺が罰を後で考えておくゆえ、今は立て！ 皆の者も事情は知っておろうが、今は確かな事が言えぬ。追って公表するから、今は日頃の生活に戻れ。これ以上の騒乱は警備隊が取り締まるぞ！」

隊長の一声で、ざわついていた野次馬達も散り散りに戻ってゆく。それは見る限り、この街の住人に隊長が信頼されていると言う事を雄弁に物語る光景だった。

散っていく民衆を見て、もう一度だけ大きな溜息を吐くと、隊長は三人へと向き直る。

「とりあえず三人には事情を聞かねばならん。議員にも既に話は通したから詰め所へは、俺も同行する。くれぐれも、もう騒動を起すような軽挙妄動は避けるんだ。わかったな？」

三人は顔を見合わせて、ホッと安堵の表情を浮かべ合う。そして、三人とも良い返事を返すのだった。

「それで……おま、ムツミはこの世界とは違う世界から落っこちてきて、ワムと出会ったと言うんだな？」

「……はい」

場所は変わって――。

兵舎に隣接している簡素な詰め所で、睦は机を挟んで隊長と向き合っていた。二人とも酷くぐったりとしていて、顔には疲れが滲み出ている。

ここに着いて、隊長直々に尋問を受けている訳だが……何度も似た質問をしては、似た答えを返す事に二人ともホトホト疲れ果てていた。

隊長としてはこの大陸以外で人間は生き残っていて、仲間が他にいるとおもっていたのだ。

睦とてそうだ。この世界に自分以外の“人間”が居ないなどと夢にも思っていなかった。

質問と答えは、六対四ぐらいの割合で睦の方が多く質問していたが、どれもこれも期待を外れたものばかりだったのだ。

ファンタジーな世界である事は、睦も想像通りだったのだが、心のどこかで期待していた魔法はこっちの世界にも無いらしい。それとは別に、物や動物の名前が違っていたりしたが、魔法が無い事がガッカリ感に比べれば大したことはなかった。

隊長としても同じようなものだ。

人間が生き残っていて古代の英知を引き継いでいるものと思っていたのだが、中身を空けてみれば、勉強ができるだけで自分達とな

んら変わらない……否、身体能力だけでいえば、今いる人々の方が遙かに上であるのだから。

シロの事でもそうだった。てっきり古代技術で使役しているのかと思えば、ただ仲良くなっただけという。なんとも気の抜けた話をされたのだから、ガツカリ感で言えば睦とそう変わらなかったのかもしれない。

「信じられません……よね？」

「いや……、そんな事はない。何よりこのケイガイセンワとかいう者に映っていた建物や乗り物は……古代、人間が造ったといわれている古代遺跡とは似ても似つかん」

とはいえ……と続けて、机に肘を突いて頭に当てる。

「はぁ……。これでは議員連中などに、どう言えいいか……」

「そんなに大変な事なんですか？」

「ん？ ああ、古い文書でな……“人間”が最後に消えたのが三千年前だと書かれていたらしいのだ。だが、消えた理由も何もかもが記されていないらしいのだ。それだけでも歴史家にとっては、現在において突然現れた人間だ。その存在が、どれほど価値のあることが分かるだろう？ だが、実際は……」

「別世界の僕が、この世界の人間が消えた理由なんてわかりませんし……ね」

「だろうなあ……」

二人していかなともし難く、双方思わず深い溜息を吐いてしまう。そんな事を何度か繰り返していた時だった。突然、六畳ほどしかない尋問室の扉がノックもなく乱暴に開かれた。

続いて、転がる様に犬頭の兵士が飛び込んでくる。

「ノックも無しとは何事だ！」

「いえ！ あの！ 大変なんです！ 貴族様の！ 貴族の……」

よほど慌てているのか言葉にならない単語だけを並べて、兵士は隊長に近付いてきた。

「落ち着け！ 報告はちゃんと行えといっているだろ！」

「それどころじゃないんですよ！ ともかく来てください！ 大変なんです！」

余りの慌てように隊長は困惑するも、犬顔兵士に腕を引っ張られるように部屋から出てゆく。そして、去り際に睦へと振り返った。

「大人しくしといてくれよ。すぐに戻るから！」

「隊長！ 早く。とにかくやばいんですよ！ ああ、時間が！」

扉が閉められると話し声も遮られ、部屋に静寂が漂った。

何もしないのは余りにも退屈なので、睦は静寂だけが支配する部屋の中で考えに徹する。それは——先程やってきた兵士の慌てぶりと、シロの事だ。

（まさか……シロ、心配になって来てたりしないよな？ ちゃんと返事をしたもんな？）

様々な憶測を考えるにつれ、次第に不安が押し寄せる。睦の脳裏に、市場で出会った安堵する人達の表情が思い出された。

（見に行くだけ見にいく！ もしも、シロが原因なら、俺が何とかしないと！）

責任感から出た結論により、睦は椅子から立ち上がった。鍵が掛けられていたらどうしよう？ という不安を持つ前には既

に、扉に手を当てていた。余程慌てていたのか、もしくは睦を信用しての事か……幸いにも、鍵は掛かっていなかった。

そっと扉を押し開き、初めに廊下の様子を伺う。

兵士達は全員が出払っているのか、何も音は聞こえなかった。

睦は開いた扉の隙間から、素早く外へと身を滑り出す。連れられて入った建物の記憶を必死に頭から引きずり出して、外へと走り出したのだった。

ムツミに出来ること……

詰め所から出た睦は、早々に自分犯したの失態に気付いた。外に出ても兵士は見当たらず、事情を人に聞こうにも聞けなかったのだ。

「どうしよう、勢いで出てきちゃったけど……。シロだったら町の外に行った方がいいのかなあ？　けど、街の入り口もよくわかんないし……」

睦が途方に暮れて、再び詰め所へと引き返そうかとも考え始めた時だった。詰め所の方から小さな影が飛び出してくるのが見える。

その影は一直線に睦へと走ってくると衝突する寸前で止まり、睦の両肩を柔らかい手で強引に掴んだ。

「ちょっと“人間”の人！　船が事故ったって本当!？」

睦に取り付いた小さな影は睦が此处に来て知った数少ない者の一人だった。それは、ダズと呼ばれていた兵士の妹——イシュテラだった。

睦は知る由も無かったがイシュテラも市での騒ぎに関して、関係者として詰め所にて事情聴取されていたのだ。

「え!？　そうなの！　俺はてつきり……」

「知らないんだ……。しゃーない。直接、見に行ってみようか？」

「へ？　あ！　ちよつとま……」

好奇心に満ちているやや釣り目がちな瞳を曇らせるも、次の瞬間

には返答も待たずイシュテラは睦の手を取り、引っ張って走り始めた。

睦は一瞬だけ抵抗を見せたが、女の子とはいえそこは獣人である。睦よりも遥かに強い力に負けて、引き摺られるように走らせられる羽目となった。

住宅街を抜けて、倉庫街の脇を抜ける。港とはまた違う場所を目指して、イシュテラは走った。訳もわからず引っ張られながらも、睦は必死について行く。

どれ程走ったかは分からない。気付くと既に足下にあった石畳の固い感触がなくなり、土を踏む柔らかい感触へと変わった時に、周囲の状況も一気に変化する。

白い建物が連なっていた景色は、緑の木々へと変わっていった。

「この先に海がよく見える岬があるんだ！　そこまで行ったらどういう状況か分かるかも！」

イシュテラは一度、後ろを振り返って説明する。だが、睦にはそれを理解するだけの余裕はなかった。

流石、力とスピードは獣人といったところだ。引っ張られているとはいえ、イシュテラの速さは尋常では無い。転ばないよう注意するだけで、睦には受け答えする余裕など無かった。

「ほら！　ここだよ。ここ！」

「はあはあ……ここ……ここって……うわあああっ！」

木々すらも抜けて、視界が唐突に広がりを見せる。睦が驚くのも仕方が無い。そこは海から切り立った断崖絶壁の岬だった。

岬から見下ろす港は、湾になっている組んだ地形を見せている。遠くの海は傾いた太陽の光を浴びて赤くキラキラと輝き、その中を白い帆を畳んだ船が慌しく動き回っていた。

「あっちゃあ……、寄りにも寄って湾の大型船湾口で事故ってるう！ 冗談でしょ！？」

湾の中でも中央に近い場所で、小型船が波に揺らされて傾いてい
るのが見えた。そこから少し離れた場所に、三本マストの大型船が
停泊している。

「え？ あそこで事故を起したらまずいの？」

「はあ？ あんた“人間”なのに何も知らないんだねー？」

イシュテラの言い草に、睦は少しムツとして言い返す。

「別に人間だとか関係ないだろ！ それよりもどうマズいんだよ？」

「あのね。あそこは商船とか貿易船とかの大型船の出入り口なんだ
よ。あそこで事故を起されて沈没されると、しばらくの間は使えな
くなるの！ つまり……この街の要である交易品が入ってこれない
って、かなり拙い事になるわ」

「他の場所が空いてるんだから迂回すれば？」

「あんたね……。まあ、いいわ。説明したげる。見えないだろうけ
ど、あそこ以外は海底に岩礁が数多く存在してんのよ。そんな所を
喫水線の深い大型船が通ったら、あつという間に港町が船の墓場に
変わっちゃうの！」

興奮しているからか、先程まで垂れ下がっていたイシュテラの尻
尾が総毛立ち膨らんでいた。

この世界に置いて、沈没船の対処方法は少々特殊であった。基本
は泳ぎが得意な種族が潜水夫として、まだ使える荷を回収し、後は
沈めたままにする。だが、沈没箇所が湾の出入り口ともなればそう

はいかない。

当然、交易船を入出航させるためには取り除かねばないのだが：作業の工程が一変し、身動きが満足に取れない水中での解体作業へと切り替わる。そうなれば、最低でも一週間は港に停泊している船は足止めを喰らう。また、入港しようとしていた船達は他所の港に行かねばならない。

問題はそれだけでは無い。

一度事故を起こした港は船主達が意図的に避けてしまうのだ。それは、港町としては大打撃に違い無かった。

「それじゃあ、どうするの？」

「わからないわ。ロープで下手に引っ張ると船体が折れ兼ねないし……かといって、両脇に船をつけて、船を固定するまで持てばいいけど……」

波に翻弄されている小さな船を、睦は注意深く眺める。船体の三分の二ほどの場所に穴が開き、必死に水を掻き出す人達の姿が見えた。

穴の大きさを見る限り、未だに沈んでいない事が奇跡にも思える。

「竜骨まで傷が入ってないといいけど、竜骨に傷がついていたら時間の問題ね……」

「イシュテラって船に詳しいんだね？　ねえ、あの船はどれぐらい持ちそうなの？」

「まあ、これでも航海士死亡だからね。どれぐらい……か。持って……そう、半陽（一時間）……ううん、すぐに沈んだっておかしく無いわね。見て、あそこ！　小型船が遠巻きにいるでしょ？」

イシュテラの指し示す方向を、睦は目を凝らして見つめる。確か

に言葉通り、波にたゆたう事故船を囲むように遠巻きにしている。
大きさは事故船よりもやや大きいぐらいだろうか？ 船は向きを揃え、それぞれ並んでいた。

「みんなも下手に手出し出来ないんだわ！　じゃあ、やっぱり竜骨も傷付いてるのね。本当はみんな何とかしたいんだけど……沈む時の引き波に引き摺り込まれない様に、ああしているしかないのよ」

深刻そうな顔を浮かべるイシュテラに対して、睦は何かを考え込むように黙り込んだ。

そうしている間にも、沈みかけている船の揺れは大きくなっている。

運悪く夕方になるにつれて、海からの風が強くなってきたのだ。

「沈むかもしれないから……手出しできないんだよね？」

「だから、そういつてるじゃない！　ああ、なんで港湾法を守んなかったのよ！　馬鹿船！」

「作業にどれぐらい掛かるの？　その……船を沈まなくするための作業は？」

「……はあ？　無理だったの！　人の話を聞いてたの？　事故船の左右に小型船をつけてたって、固定するまでに沈んじゃうのよ？　そうなれば三隻も港を塞ぐ羽目になるわ」

呆れと怒りの表情を浮かべるイシュテラとは対照的に、睦は真面目な顔を崩さない。しっかりとイシュテラの肩を掴み、獣人の少女を正面から見据えた。

「どれぐらいあれば、その作業が終わるの！？　早く答えて！」

イシュテラは今しがたまでオドオドしていた睦の豹変に驚き、呟

くように質問に答える。

「たぶん、半陽……うん。準備は出来てるだろうから、もっと早く済むかも……」

「……俺とシロが何とかするから、君は皆に知らせてきて！」

「え？　は？　え、何とかするってどうやって！？　それにシロって？」

「いいから、竜頭の隊長にシロって言えばわかるから、早く！」

それだけを言い残すと、呆然としているイシュテラを残して、睦は駆け出した。

今までに無いほど足を動かし、岬から確認した街の外へと続く門に急ぐ。

転びながらも丁度開いていた門から外へと飛び出すと、シロが飛んでいった方角に向かって睦は声の限りに叫んだ。

「シロオ！　シロオオ！　俺はここだよ！　直ぐに来てくれえ！　シロオオオオオ！」

外壁の外に広がる平原に、睦の声が虚しく響き渡る。

睦の脳裏に一瞬だけ不安が過ぎるが、頭を振ってそれを振り払う。出会って間も無く……しかも、相手は野生のワイバーンだ。それでも、睦は信じていた。

あの少し間の抜けた泣き声で話す、この世界の相棒を……

——ルオオオオオ……ッ！

離れた森の奥から、聞こえてきた声が睦の耳に届いた。たった数時間しか離れていなかったにも関わらず、酷く懐かしく感じてしまう。

睦に安心すらも覚えさせた声が、大気を震わせる。森の木立から鳥達が一斉に飛び立ち、その中を神々しいまでに純白の鱗を持つ飛竜が飛んでくるのが見えた。

空を泳ぐ白い影が大きくなるにつれて、睦の心には言いようの知れぬ安心感が広がっていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677x/>

トンデモわいばーん

2011年11月10日06時22分発行